

「落語と私」 その貳拾参

三代目 橘ノ百圓

春が終わりますテェと、夏になります、夏の嘶で皆さんの頭に浮ぶのは、何ンですか！？やはり「船徳」ですか？それとも「佃祭」「青菜」なんかも在りますネ。近頃の暑さは、人の生死に関わるほどです。50年前までは、38度、40度何ンテェ気温は記憶に在りません。やはり、地球温暖化が原因ですかネ！？習近平さん、トランプさん何ンとかしてください。

夏の嘶は、水に関わるものが多い様に思います。それと、幽霊、お化け何ンテェのも在りますネ。「一眼国」「お化け長屋」「応挙の幽霊」「三年目」まだまだ在りますが、中には「千両みかん」テェのも在ります。

今でこそ、真夏は冷凍みかんが有りますから、別に驚きませんが、江戸時代には、みかんは冬の物、家族で炬燵に入って、みかんを摘む、みかんを食べながら「紅白歌合戦」を観る、そんな連想です。

この「千両みかん」は、日本橋のさる^{たいけ}大家の若旦那が原因不明の病で床に着く。両親の心配は一通りでは無い。名医の見立てで「病^{もと}の原は何か思い悩んでいるので、それを叶えて上げれば治るだろう」と告げて帰る。そこで両親は幼い頃から仲良しだった、当家の番頭に本心を訊いてもらいたいと頼むと、番頭は主人の言葉に感謝をしながら、若旦那の部屋へ「若旦那早く元気になってくださいヨ。ご両親が心配してますヨ。医者^おの見立てでは、何か想いつめている事が^お在るから、それを叶えて上げれば若旦那の病は良くなると言っていましたヨ。その想いをこの番頭に話してくださいナ。何ンとかしますから」「じゃあ笑わないで聞いておくれ。実は、私の想いは、あの水みずしい、ふっくらとした、肌のつやつやとした…」「ヘイ解りました。若旦那、何処の娘さんで！？」「娘じゃないんだヨ。そう言う“みかん”が食べたいんだヨ」「エッ何んだ馬鹿ばかしい。そんな物ンは私が直ぐに買って来ますから、元気イ出してくださいナ」「本当かい！番頭さん頼んだヨ」テンで若旦那の顔色は良くなりまして、大旦那に話しをすると、大旦那^{いわ}曰く「お前この八月の土用に何処でみかんが売ってるんだい！？一度請け合った物を無いと言ったら、倅はガッカリして死んじまう、そうなったら私^{しご}しゃお前を主殺として訴えますヨ、主殺は逆さはりつけだ！直ぐにみかんを捜して来なさい」

番頭は真青になって数軒の八百屋に行き「みかん有りますか！？」「番頭さんシッカリしてくださいヨ、この土用^{さなか}の最中にみかんが有りますか」何処へ行っても答えは一ツ、間違っ^てて飛び込んだ魚屋（金物屋）の主^に、逆さはりつけの怖い話しを聞かされるが、その主が「お前さん、神田の多町へ行ってごらん。万惣^{まんそう}（万亀）と言うみかん問屋が有るから、そこなら有るかも知れ^ねエヨ」と聞いて多町の万惣へ「みかん有



千両箱

出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

りますか!?!」「お幾ツ、一ツ、ヘエーツぐらいなら有るでしょう。オーイ、みかんのご用だヨー」と奥に声を掛けると若い者ンが五、六人。三戸前の蔵の鍵を外し、ガラガラっと大扉を開けると、中から涼しい風が。梯子を掛けて上から、みかん箱をほうり出すと、下の者が蓋を開け、土間にみかんを並べるが「こらァ駄目だ、これも駄目だ」テンで土間は腐ったみかんの山が出来る。最後の三番蔵!残り少なくなった頃「有りました。これなら、つやつやして型も良い、番頭さん有りましたヨ。」「有難うございます!これで私の命も助かります。デッ、お幾らですか?」「千両です。」ここで千両の値の謎解き(中略)「ハイ解りました。千両の値、私の一存では決めかねますので、主に訊いて参ります。」と、店に戻った番頭さんが「旦那、みかんが有りました。」「オオそれは良かった、直ぐに買って来なさい。」「旦那、それが一ツ千両です!」「千両、安いじゃないか、倅の命が助かるなら安い物ンだ」と言うので代八車に千両箱を載せて、みかんを一ツ(中略)「旦那、買って参りました。」「直ぐに倅に食べさせて遣っておくれ」番頭さんは、若旦那の部屋へ「みかん有りましたヨ、どうぞ召し上がれ。只、親御さんのお心を忘れちゃいけませんヨ、これ一ツ千両ですから」「番頭さん有難う、お父っつあん、お母さん頂きます」皮を剥くと十房入っている。若旦那は実に美味そうに一房、二房、その度ンびに番頭は「アッ!百両、アッ!二百両」若旦那は七房食べた処で「アア美味かった、これで元気になりました。番頭さん、ここに三房残っています。これを、お父っつあんとお母さんに一房ずつ、それに、お前にも一房上げますから食べておくれ、ご馳走様でした」これを聞いて番頭さんは大感激。お盆の上に捧げる様に三房のみかんを乗せて下に降りて考えた「私は来年暖簾分け、その時頂けるのが多くて五十両、今ここに参百両…旦那すいません」とこの番頭さん、みかん三房持って行方知れずに。価値の錯誤による考え落ちです。これは夏しか出来ない噺です。又、実力が無いと、お客様を納得させられません。原話は上方噺で、舞台は中船場、みかんは天満の果物問屋です。只、前述の通り、今は冷凍みかんも有りますし、近頃は栽培技術の発達で、1年中生のみかんが出廻って、時期によっては、高級果物店で1個二阡圓近い品まで有る様です。次回は「秋の噺」ご期待ください。



神田青果市場発祥之地

出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>